

芸妓国助一代顛末

——魯文閣『金花胡蝶幻』備忘——

A Study on the Biography of geisha "Kunisuke" who is the chief character
of the book called "Natane-no-hana Kocho-no-maboroshi"

山 本 和 明

明治十三年、ひとりの芸妓が草双紙の紙面を飾った。名は国助。猫々道人こと仮名垣魯文閣、京文舎文京綴、守川周重画『金花胡蝶幻』三卷九冊がそれである。

「京浜間に浮名高き／芸者国助の因縁はなし」（初編袋）と角書にあるように、国助は実在の芸妓、横浜では名の知れた存在であった。その実在の芸妓が主人公となり、合巻に仕立てられ売り捌かれてゆく。いまや「猫」「鯰」と言っても通用しないご時世だが、芸妓と官吏をあらわす言葉として、明治の時代には生き続けた。両者ともに、小新聞紙上、人々の注目を浴びた存在だったが、草双紙にまでなった「猫」となると、さほど多くはない。その稀有な存在、芸妓国助の一代記が、この『金花胡蝶幻』である。本稿では、これまでの調査の備忘を兼ね、本作をめぐる話柄について、整理しておくことにしたい。

梗概と書誌周縁

『金花胡蝶幻』について、まずその梗概を示しておく。

〔初編上巻〕今を去る事十三年前、京橋南伝馬町の挽櫛問屋伊勢屋清次郎の長女おそのは年も二八。日々茅場町の清元某の許へと稽古に通い、石工職秀太郎という若者と情を通わせることとなる。度重なる逢瀬が父の耳に入り、外稽古をいましめられるが、程なく仲人を介しておそのを妻にと石秀は申し出で、二人は夫婦となった。三年が過ぎ、秀太郎は博打にふける癖あれど、資本を殖やしてくるため怪しまず、夫婦仲睦まじく暮らしていたが、十月のある日、酔って深夜帰宅の秀太郎は入口の戸締まりもせず閨屋に入り、おそのは介抱していた。その時、盗賊三人突然として入来たつた。おそのは狼狽、なぜか秀太郎は落ち着きましていたのであった。一人の盗賊が秀太郎の顔を差し覗き、驚く。秀太郎は、実は根付川の秀太郎という盗賊だったのだ。

〔初編中巻〕盗賊たちに小遣をやり、その場から帰した秀太郎に、おそのは夫の身上を聞き知り驚くものの、改心してくれるとの約束に眠りにつく。○さて三人の盗賊が隠れ家へ立ち帰る時、四人の官吏と行き会い捕まる。そこから石秀の陰悪露顕し、翌朝に捕手により捕まる。三賊とともにその年の暮れ、梟首の刑に処せられることとなる。おそのは夫石秀の首を乞い、谷中の菩提所へと葬り、日々仏事を営んだが、三十五日という日、塔婆の影より陰火立ち上る奇瑞を見るのであった。三月中旬、寺の帰りがけのおそのの姿をみた四国の藩主の分家何某は、おそのを恋い慕い、龍門の長吉に、おそのを妾にしたいと依頼する。

〔初編下巻〕龍門の長吉は、おそのの実家へ行き委細を語る。亡き夫の導く縁、この身にとつても幸いと承引し、俄の出世を果たす。一年余り四国に過ごし、再び東京へ。丁度改革の時に遇い、築地辺に邸宅を構えること

となつた。昼夜遊興、遊民芸徒の入り込む中、三味線弾き竹本播磨太夫を主人がご鼻屑にし、日夜泊まる中で、おそのは播磨太夫の面差しが亡夫石秀に瓜二つ、果ては密事となる。そのことを夫何某も聞き知り、若干の金を与えられ、おそのは永の暇となつた。両親は流行病で亡くなり、豪奢にふけり負債さえ出来て、おそのは新橋金春新道の尾張屋にて出稼ぎとなり、名も国助と改め、引つ張りだこの全盛を迎える。

○板元伏て申す 此国助の物語りは頗る長談にわたり中々三編には納りかねるを作者が自在筆力にて大団円にはしたもの、末に至つて読多く筆耕はまり兼升故順に読を操上げたれば看官其思召にて御覧の程をひとへに願上奉り升（註―画文不一致を示している）

愛顧の客人の中で、豪家の聞こえ高き製造場売場の支配人藤屋栄蔵は、家長の代理で日々割烹樓に来、国助と良い仲となる。○藤栄の妻はかつて深川の仮宅大籬の久喜万字屋の唐琴、藤栄により身請けされ、お玉と名乗り、仲睦まじき夫婦であつたが、この頃夫が夜泊まり日泊まりの毎日。芸妓狂いを察し証拠を押さえて寝取つた女の皮をひんむいてくれんと、出入りの女房に藤栄の行先を探らせる。

〔二編上巻〕船宿二階座敷にて藤栄と国助とは互いに口説の最中、お高祖頭巾のお玉は、二階に上がつて現場をおさえる。藤栄はお玉を連れて我が家に帰り、亭主に恥をかかせたと怒り、三行半を渡す。お玉は国助の悪行を語るが聞き入れられず、本店伊勢勝方へと走りゆくのであつた。

〔二編中巻〕栄蔵はお玉と離縁。程なく国助に座敷をひかせ、新橋より築地の家に引き取る。亡夫の命日、国助ことおそのは、藤栄の留守を幸い、谷中の寺に参詣。柳原の土手を行くとき亡夫石秀の姿臆臆と柳のもとにあらわれるが、実は夢（神経病）であつた。亡夫石秀の面影は夢と思えと目を遮り、そのうち藤栄とも心隔てていく。ところで、今嶋伊の助は、国助が芸妓の頃深く思いをかけていたが、藤栄の妻となつたを遺恨に思い、藤栄の落ち度を伊勢勝方に迫る。そのため本店も栄蔵を放逐。俄に営業を失つた藤栄は国助とともに入舟町の借家に

すむうち、栄蔵は婁麻窟斯（皮膚病）を煩う。国助は本夫の本復を願ひ、お岩稲荷へ跣足参りをするのであった。○茲に又男たらしの評判高き横浜尾上町の芸妓岩栄吉（一名疵栄當時都々一瓶）は、辨天通の売込問屋喜多利屋の若主人兼七に退かされ、芸者屋をすることになる。二百円の資本金をもつて東京に出た栄吉は、訳ありの坂東家橘などとハデな遊びに浮かれていた。

〔二編下巻〕明け方、栄吉は紫金錠宝丹などの酔い覚ましに、向こう岸を眺める折、跣足参りの国助を見、藤栄・国助のいる小田原町に行き五円の見舞いを置く。（アア草臥た文京も一寸一吸烟）

〔三編上巻〕国助は、栄吉の世話になることにし、横浜へ向かう。病気の藤栄には野毛山の十全病院「ドクトルセメンス」の治療を受けさせ、六二連長富田砂燕の周旋による国助の弘めで、座敷の絶え間もないほどだった。さて藤栄の前妻唐琴は、色々あつて再び横浜泉橋樓の娼妓白玉となった。ある日、喜多利屋の売込先の外国人への饗応で、泉橋樓へと国助も同棲した。白玉はひと目見るより国助の元へ行き、客憚らずの口争い。此廓の男芸者閻魔と名代の櫻川善八により仲裁される。

〔三編中巻〕この後、飲み通しの酒宴に国助熟睡し、目覚めたときに石秀の姿。実は処刑されたは別人とのこと。国助は嬉し抱きし折から、善八により本当に揺り覚まさる。覚めて傍らに臥した男を見れば兼七。我知らず兼七・国助は関係を持つてしまったのである。互いに口を拭いながら、栄吉に忍んでの仲となった。ある時、栄吉夜明かしの留守を幸い、二人は共に寝入るが、栄吉が突然戻つて来て危ういことがあった。翌正午頃、起き出した栄吉は蒲団の上に国助の櫛を発見する。

〔三編下巻〕栄吉はつと心の動揺。胸の火燃えたち確かな証拠を見届けんとす。ある日、出先は神奈川の旅店樺村と聞くより、栄吉は、般若の面相狂気の如く剃刀取り出し飛び出す。人力車の二人を見つけ、栄吉は国助覚悟と剃刀逆手に追いかけて回すが、此の場に乗りに付けた川村屋初五郎に止められる。恋のもつれを初五郎の仲裁。国

助は、兼七に、わたしは別れて自前になる氣、その入費はあなた出金をと、後悔先に立たずの金二百円の手切れを貰い、疵栄への借金返済、余る金にて尾上町に新たに杉の屋国助と自前となった。本夫藤栄も出院後、箱屋同様扱われる始末。国助はその後、名代の豪商を惑溺し、仏国館の雇い人と深く契りを結び、芸妓を退いて世帯をもつが、別れてからは見る影なく、卒塔婆小町同様落魄したという。茲に勸懲の端にもなればと筆に書き著したまで。めでたしめでたしと終わる。

「京浜十里の内に往還始め靴屋の白鼠藤栄を先として我に惑溺る漂客鼠を悉く齒牙に懸たる国助寢兎が変化自在の小伝」と初編序に云う。あたかも、おそのこと国助の、一代記の様相を呈している。石秀の霊が織りなす因果、といった近世戯作に垣間見られる側面もあるものの、三編下巻での、疵栄こと岩泉栄吉との喧嘩が、作品の見せ場の一つであり、両者ともに実在の人物であったことが確認されている。

内容検討に入る前段階として、以下、その刊行の経緯など、書誌的事項を簡略に押さえておきたい。

まず書名の訓みだが、二編序ならびに二編上巻内題では「金花胡蝶幻」とし、二編発兌広告（「いろは新聞」二七一号・明治十三年十月二十八日）では「金花胡蝶幻」とするものの、ほかは「金花胡蝶幻」と表記する。こちらを採るべきだろう。冒頭呈示した角書も、初編摺付表紙（中巻）では「京浜間に浮名高き／芸妓国助が因縁話」とある。三編九冊（一冊九丁）からなる合巻で、猫々道人こと仮名垣魯文原稿、京文舎文京綴、守川周重画。青盛堂加賀屋堤吉兵衛から刊行された。

刊行時期だが、序文表記を確認するに「明治十三年夏日 金花猫翁魯文戯誌」（初編）、「明治十三年七月 猫々道人魯叟題」（二編）、「明治十三年六月猫日 猫々道人魯翁戯記」（三編）とある。奥広告には刊年記載なし。ただし初編下巻本文末尾に「御届 明治十三年五月十日／横山町二丁目十七番地 編輯人 渡辺義方／米沢町一丁目六番地 出版人 堤吉兵ヱ」、三編下巻本文末尾に「御届 明治十三年五月十日／米沢町一丁目六番地 出版人 堤吉兵ヱ」

と記される。出版御届は、明治十三年五月十日となろう。

三日後の五月十三日付「いろは新聞」一三〇号には、早くも次の記載を見いだし得る。

カチ／＼東西猫洒落誌の娯愛看さま方へ一寸五披露当新聞へ長／＼記載致しました火高川珍々奇聞を今般横山町の辻文方より「恋相場桜花夜嵐」と改題致し吉野の甚ちやん夫婦が履歴日本橋の芸妓さくら屋お八重丸岡幸次郎の事跡をも増補し近日例の三冊物の合巻にて発兌又その後の続き話説「金花胡蝶幻」は当社同町の加賀吉が合巻に製本し此も近日発兌ますれば今の内より娯評判／＼

「加賀吉」とは青盛堂加賀屋吉兵衛のこと。この段階で「合巻に製本し此も近日発兌」されることが予告されるが、実際には、いま暫く時間を経て刊行されたようだ。新聞広告より窺い知る刊行時期としては以下の通り。

◇「いろは新聞」一七〇号（明治十三年六月二十九日）広告

猫々道人原稿 京文舎文京綴 守川周重画

京浜間に浮名高き 芸妓国助の因縁嘶／金花 なたねのはをてうのまほろし 胡蝶幻 三編読切

初編七月一日売出し仕まつり候

右はいろは新聞で先々娯評判に預りました長物語昼寝の夢の幻草お睡気覚しのお伽にと例の合巻に書綴り彫刻も挿画も美事な仕立看客沢山娯注文娯評判の程奉希望候也

板元 両国米沢町一丁目 青盛堂 加賀屋吉兵衛

◇「いろは新聞」二七一号（明治十三年十月二十八日）広告

猫々道人原稿 京文舎文京綴 守川周重画

京浜間に浮名高き 芸妓国助の因縁嘶／金花 きんくわこてふのまほろし 胡蝶幻 三編読切

二編十月廿八日売出し仕まつり候（以下略）

広告に従うならば、明治十三年七月一日初編、同年十月二八日に二編刊行となる。三編については、残念ながら掲載広告が確認されず、現在のところ未詳というほかはない。

編者の京文舎文京について、野崎左文『私の見た明治文壇』には次の如く紹介される。

渡辺義方氏東京の人湾泊童子と号す、魯文の門に入り翁より花笠文京の号を譲られて二世となり、いろは新聞、絵入自由等の記者として続き物の小説を書いて居たが、其後僧侶より出て実業家となつた宏虎童氏に就て実業界に入り、品川電燈会社の支配人ともなつて蓄財し、三田豊岡町の自宅附近に貸屋などを建て、自分は釣魚を唯一の楽しみとし気楽に餘生を送つて居たが、麻布竹谷町に移転後何か事業に手を出して大損失を招き、北海道に在勤中の養子某は急病にて死去し細君また精神病に罹るなど種々の不幸続きで落魄其極に達し、大正十五年悶々の間に死亡したとの事である。

〔仮名垣魯文翁の自伝〕

「湾泊童子」の号は、『離の菊操鏡』二編自序（明治十四年二月）に署名あり。同下巻には「代作屋文京」と初代花笠文京に倣う号も見受けられる。「いろは新聞」明治十二年十二月十三日記事に「浪華男京都日々新聞の記者我楽多珍報の編輯長雑賀豊太郎さんがお入。又かなよみから譲り者箕田の綱公が孫立孫渡辺義方が鬼の腕を振つて入社」とあった。「京文舎（あるいは京文舎）」の号は、云うまでもなくいろは新聞の本局「京文社」からの命名である。京文舎文京を名乗る著述として、『金花胡蝶幻』のほかに『冬児立闇鴉』（青盛堂、明治十三年）、「名広沢辺萍」（金松堂、明治十三年）があり、ともに「いろは新聞」掲載のつづきものであった。その文京も、明治十四年十月九日「いろは新聞」五五二号には信陽日々新聞へ招聘されたとの記事が見いだせる。

○弊社創業以降客年の秋迄編輯で居升た渡辺義方（文京）は今度信陽日々新聞（信州松本）へ聘よぶされ来る十四日に出発致し升又同新聞は論説もありて雑報には絵を加へ（画工も東京から聘よぶとの事）ると云升から発兌になつたら復娛披露

「客年の秋」とは即ち明治十三年秋にあたる。この記事からは、ちょうど『金花胡蝶幻』二編刊行の頃まで「いろは新聞」編輯にたずさわっていたことになる。以後の文京の足跡については、松原真「自由民権運動と戯作者」（日本文学58—9）に詳しい。

つづきものと合巻

「いろは新聞で先々娯評判に預りました長物語」と「いろは新聞」一七〇号広告にあったが、仮名垣魯文による序文でも、「藤栄を先として我に惑溺る漂客鼠^{うかれねずみ}を悉く齒牙^{しげ}に懸たる国助寝児が変化自在の小伝を曩にいろは新聞紙面へひッ搔散し、柱の爪跡かけ尿便の様々を青盛堂が金籠の精製美冊になさむを乞ふより例の文京子余に代り絵を添文の足らぬを補ひ」（初編序）、「故らにいろは紙上に於て陸続掲載せし如きは其事尤実^{ふみ}に近く一読して婦女子の戒慎となす可きもの将来一小冊史に止めて貞淫黑白を照らすの鑑とせまじと書肆^{ふみや}が需に社員文京余が水茎の跡を踏」（二編序）と記載される。本作を考える上で、「いろは新聞」との繋がりは重要である。実際、「いろは新聞」紙上「猫洒落誌」欄に、三十三回に涉って「金花胡蝶幻」は連載された。「いろは新聞」に連載されたつづきものに、挿絵を織り込んで草双紙仕立てにしたのが合巻『金花胡蝶幻』だった。いろは新聞の「猫洒落誌」欄と版本（合巻）とが対照できるよう、一つの目安として、次のように整理することができるだろう。

◇「金花胡蝶幻」（「猫洒落誌」欄掲載）

合巻『金花胡蝶幻』該当箇所

- | | | | |
|-----|----------|--------------|-----------|
| 第一章 | いろは新聞八五号 | （明治十三年三月十九日） | 初編上巻5丁表まで |
| 第二章 | いろは新聞八六号 | （明治十三年三月二一日） | 初編上巻7丁表 |
| 第三章 | いろは新聞八七号 | （明治十三年三月二三日） | 初編上巻9丁裏 |

| | | | |
|------|----------|--------------|---------|
| 第四章 | いろは新聞八八号 | (明治十三年三月二四日) | 初編中巻3丁表 |
| 第五章 | いろは新聞八九号 | (明治十三年三月二五日) | 初編中巻4丁裏 |
| 第六章 | いろは新聞九〇号 | (明治十三年三月二六日) | 初編中巻7丁裏 |
| 第七章 | いろは新聞九一号 | (明治十三年三月二七日) | 初編下巻1丁表 |
| 第八章 | いろは新聞九二号 | (明治十三年三月二八日) | 初編下巻5丁表 |
| 第九章 | いろは新聞九三号 | (明治十三年三月三〇日) | 初編下巻8丁表 |
| 第十章 | いろは新聞九四号 | (明治十三年三月三一日) | 二編上巻4丁表 |
| 第十一章 | いろは新聞九五号 | (明治十三年四月一日) | 二編上巻5丁表 |
| 第十二章 | いろは新聞九六号 | (明治十三年四月二日) | 二編上巻7丁裏 |
| 第十三章 | いろは新聞九七号 | (明治十三年四月三日) | 二編上巻9丁裏 |
| 第十四章 | いろは新聞九八号 | (明治十三年四月六日) | 二編中巻3丁表 |
| 第十五章 | いろは新聞九九号 | (明治十三年四月七日) | 二編中巻4丁裏 |
| 第十六章 | いろは新聞百号 | (明治十三年四月八日) | 二編中巻6丁裏 |
| 第十七章 | いろは新聞百一号 | (明治十三年四月九日) | 二編中巻9丁裏 |
| 第十八章 | いろは新聞百二号 | (明治十三年四月十日) | 二編下巻1丁裏 |
| 第十九章 | いろは新聞百三号 | (明治十三年四月十一日) | 二編下巻6丁表 |
| 第二十章 | いろは新聞百四号 | (明治十三年四月十三日) | 二編下巻9丁裏 |
| 第廿一章 | いろは新聞百五号 | (明治十三年四月十四日) | 三編上巻5丁表 |
| 第廿二章 | いろは新聞百六号 | (明治十三年四月十五日) | 三編上巻7丁裏 |

| | | | |
|-------|-----------|--------------|------------|
| 第廿三章 | いろは新聞百七号 | (明治十三年四月十六日) | 三編上卷9丁裏 |
| 第廿四章 | いろは新聞百八号 | (明治十三年四月十七日) | 三編中卷1丁裏 |
| 第廿五章 | いろは新聞百九号 | (明治十三年四月十八日) | 三編中卷5丁裏 |
| 第廿六章 | いろは新聞百十号 | (明治十三年四月二〇日) | 三編中卷9丁表 |
| 第廿七章 | いろは新聞百十一号 | (明治十三年四月二一日) | 三編下卷3丁表 |
| 第廿八章 | いろは新聞百十二号 | (明治十三年四月二二日) | 三編下卷6丁表 |
| 第廿九章 | いろは新聞百十三号 | (明治十三年四月二三日) | 三編下卷9丁裏 |
| 第三十章 | いろは新聞百十四号 | (明治十三年四月二四日) | (こゝまでを合巻化) |
| 第三十一章 | いろは新聞百十五号 | (明治十三年四月二五日) | × |
| 第三十二章 | いろは新聞百十六号 | (明治十三年四月二七日) | × |
| 第三十三章 | いろは新聞百十八号 | (明治十三年四月二九日) | × |

新聞と合巻との大きな相違点は、その終わり方にある。合巻では新聞の第廿九章までを取り纏め（一部第三十三章までの内容にも触れる）、性急なまでに完結へと向かつてゆく。参考のため、三編下巻末尾本文を挙げておく。明らか
な誤表記もそのままにした。傍線ならびに【一】内は山本による補記である。

国介は人を以て兼七方へ言せるやう貴君と妾が淫行も那姉さんへ知れた上は抱えに成つては居られぬ場合殊に途中の刃物三昧若此事が本夫へ知れたら貴君が重る御難義ゆゑ妾は別れて自前に成る氣その入費はお氣の毒でも貴君が出金して下さいと退引させぬ夫者の魂胆美男自慢は山鳥の己が姿に溺る、兼七偕は化猫の据膳に一杯手盛を食つたかと今更後悔先に立ず金二百円の手離を与へ向後の縁が離しを幸ひ国介は独り笑み佳く行たと心に点頭き此手切金にて疵栄の借金を返済なし余る金にて尾上町五丁目の取付へ新たに杉の屋国助と縁喜提灯を耀かし自前

の身と成し頃本夫藤栄諮野毛山の十全病院へ入院せし後追々病ひの全快の緒口となつて出院し国介の家に同居して病痾のつかれを養ふ内国介は兎角に石秀の事のみ思ひ夢の事杯快よからず貧すりや鈍する今の身のうへ箱丁同やう扱かはれて女房にまでみ捨られ生甲斐のなき意気地なしと我身を悔む病後の愚痴をふりし外出の知己に便り此事を咄すを聞き或人の情により海辺十番館の番頭に住込んでのち妻国助は石秀が悪霊のなす業がおひくゝ募る身の醜行同港南仲通りに名代の豪商何某を惑溺させ【補記・新聞第廿九章までに該当】其後仏国館の雇人鈴坊チャンと花柳巷に恋名も高き綿貫某と深く契りをむすんでのち【補記・第三十章から三十三章に記載内容】芸妓を引て東京へ来り築地辺にしばらく世帯を持て暮せしが浮気者の癖としてどうで末はまとまらず當時はわかれて詰らなくはや散りそめし園の梅二度の勤めもなり難く見る影もなく落魄しとは卒塔婆小町の昔しを茲に浮気芸妓や汚転婆娘の卿か勸懲の端にもと拙なき筆に書著はしぬチョンチョ、、、、先此合巻は此で結局御評判の程ねがひ上升めでたしくくくく【補記・以上、新聞記載なし。三編末尾】

新聞連載第廿九章では「おひくゝの淫行に稼ぎし金も塵埃遣ひ果して一娼法と南仲通に有名の弗商亀角の主個あるにを惑溺らし大金を貪る話説は引続いて例の明日」と具体的に浮き名の相手を記すが、合巻ではなぜか「何某」と臆化し、曖昧な形とし、それまでとは打ってかわって取り纏めへと筆を走らす。国助（国介）や疵栄など芸妓の名がそのまま記されているのとは対照的でさえある。

合巻が性急に結末を付けているのに対し、「いろは新聞」「猫洒落誌」欄のつづきものは、第三十三章末尾（明治十三年四月二九日）でも、決して完結したとは言ひ難い。途中で中絶したとの印象は拭いようがないのである。

…角武蔵のお浪を酣酌に後口かけし小そのが来るをまつ葉越の月洩れて来訪ものは野毛山の鐘更々と聞えける（以下次号）

記者曰本文の長物語探訪成丈密ならんと欲すれ共伝聞の誤説なき能はず社友の一話に前條藤栄が妻唐琴改名お琴

後におとしと呼しがお玉といひし事なく此者久喜万字様に娼妓の頃より四日市住太の豊の持物成しがその頃藤栄に膳を据彼者の妻と成しといふ藤栄が国助と馴染たるは一度金春の芸妓を廃業してその実家に戻りし頃なり其頃藤栄は築地一丁目の靴長家に住神奈川の娼妓脱りおきんを妻とせし時にて此おきんが嫉妬の余り主人伊勢勝へ告口せしより藤栄は同店を放逐されしにて全く後妻お琴（又おとしが）讒言せしには非ずといふ

おそらく合巻御届の「明治十三年五月十日」の日時を考え併せるならば、この前後に合巻化が決定したのでらう。第三十三章にて「記者曰」以下、訂正された事柄は、合巻には全く反映されることもなかった。

書冊となることが明らかになった途端、新聞連載を中断することは、当時の常であり（拙稿「稗官者流の〈明治〉「文学」二〇〇九年十一月号参照」、本作もそうした一連のつづきものの有り様に適っていたと思しい。

新聞連載は評判高く、初編刊行前にすでに演劇にもなっていたようだ。

○チト自分の田へ水の様な五披露ながら今度横浜港座の劇場は俳優の顔も改り時蔵が座頭でしか（久々のお目見）と兄弟の一座例の真土村一件へ弊社新聞猫洒落誌へ長々記載し芸妓国助の事跡を綴入一中節の淨瑠璃外題は矢張「胡蝶の幻」（国助）坂東しうか（藤屋栄蔵）嵐芳五郎（川村八五郎）が中村時蔵にて此狂言方に東京の柳亭燕枝（一号あら垣痴文）が出港して大尽力都ていろは新聞の桃燈持に類したる脚色ゆゑいろは蟲屑の六二連長富田砂庭氏と弊社支局の守屋正蔵がしうかへ引幕一張又川村田原の両子より時蔵へ同一張港内の猫連より時蔵へ同一張いよいよ昨日が開場にて大景気弊社の猫翁も七里間汽車の宙乗で二三日内に飛出す様子こいつはゼツヒ看ずば成まい

（「いろは新聞」明治十三年六月十七日記事）

演劇にまでなった国助にせよ栄吉にせよ、当時の読者にとつては、先刻ご承知の存在であつたようで、そのことは、つづきものの文中に端々で窺える。「記者曰以下石秀が悪事露頭おそのが成行一度出世して大身の権妻ひかひとなり後に新橋の芸妓尾張屋国助と呼ばれて浮名を流す盛衰ばなしは引続いて追々載ます」（第五章）、「横浜尾上町の芸妓岩泉

栄吉（一名疵栄当時都一瓶）とて楊貴妃小町の容色なけれど男魅しの評判は諸新聞に浮名高く」（第十七章）といった具合である。かくも有名人であつた国助や栄吉とは一体何者であつたのか。当時の新聞を追跡し、その紙面を賑わした様相を確認してみたい。

未分化のつづきもの

「いろは新聞」百十一号（明治十三年四月二二日）掲載、第廿七章末尾に「東西此一回は猫々道人が未だ横浜に在し頃仮名読新聞何号かへ「喜美談誤」と題して五六回の続き物とせし事ありしは彼紙上を読給ひしお得意方の知る所る重複ながら又茲に繋がる縁に依て再記す」とあつた。雇主の兼七と深い仲となつた国助のことを知つた栄吉は様子を伺い、出会茶屋へしけ込んだ二人の事を聞きつけ、その現場に走り行くことが描かれている場面なのだが、確認してみるのは、指摘の如く「かなよみ新聞」明治九年十一月二九・三十日掲載「迷路珍説／喜美男誤 一名おとこ地獄 掛合 娛猫楼国輔・岩泉亭平喜」に、その一件に関する記述を見いだすことが出来る。執筆者は猫々道人こと仮名垣魯文。話芸であることを暗示する絵を掲げるなど、実説めかせぬ工夫さえ垣間見られる。「喜美男誤」の分析検討は、すでに佐々木亨『明治戯作の研究 ―草双紙を中心として―』（早稲田大学モノグラフ21・早稲田大学出版部・二〇〇九年一〇月刊）に詳しい。以下、全文を記すことは出来ないが、「喜美男誤」本文を適宜抜粋し、紹介しておきたい。冒頭は伊勢物語風に始まってゆく。

「男地獄といふ綽名を受た、今の世には奇しい女たらしの男なん有けり」。「男がよくて芸者屋育ち、浮気女をたらし込む妖術は妙を得て、櫛の棒は持たねども猫殺しの評判者。『美男』く〜と名に呼ばれ、猫と見たら斑でも三毛でも手馴けて佳く抱込み、身の毛は勿論尻尾の毛迄抜尽た揚句の果は母猫の方へ連込み稼がせるのが十八

番。「はまりこんだは男にかけての玉に疵砕け安い岩泉の栄吉といふ横櫛芸妓、こんな男を色に持ちや身は道楽猫の果報ぞと、足つけ二年仕送りで、来る度に猫脚のお膳を据へ、衣服やら寝道具まで入揚、犢鼻褌の汚れた迄も雇女の手にかけず大江山の衣洗ひ世界に独りの男蛇と楽しむ」。「元は出雲町とか金春とかからゴロニヤンと飛出して浜猫ヤンチャンの社会に入り、藤栄とかいふ商人に思はれて、その女房は新吉原の久喜万字の唐琴と云ふ娼妓で横濱の泉橋楼へ住替に出た白玉といふ古狐を追出して、跡に坐つたお国といふ漠連猫が二度の勤めの出歸りを抱へにし」、「栄吉は二十円の工面をしてお国を抱へ、国助と名も更めての二度の弘め。はや二三日と近附内、今月三日の夜、栄吉が座敷から帰つて見ると美男と国助がおかしな様子に鉄瓶の沸音はチン／＼。其夜は愚頭／＼泣寝入」。「サア是唐は、二百廿四号に載せた日高川渡舟場の一段、いよく大黒屋大悶着の剃刀騒ぎより引続き、横櫛のお栄が箱屋の蝙蝠野郎を連て弁天通り店頭のせりふ廻しは、又明日お聞に入ます」(以上、「かなよみ新聞」明治九年十一月二九日掲載)

「抱えの国助に寝取られて看換られ、猫の仲間へニヤンとマア顔向けが出来やうか、思ふ念力岩泉、命にかけて此遺趣をはらさいでおくべきかと剃刀二挺を合せ砥に研すましたる如夜叉の形相駈出す」、「偕此場合が納まりかね、増新といふ俠客が仲へ立入いよいよ手切話となり、一昨二十八日に金百三十円男から栄吉の手元へ渡し、国助へは栄吉から二十円の証文を巻いてやると、国助は独立の自業となり、彼美男が後ろ楯にて去る二十六日に尾上町五丁目へ引移り、来月一日から弘めをする事に極り、当つて碎ける岩泉まるく納まる国助の枝を鳴さぬ時津風とあひに相生町の松廼屋五葉君からお知らせは是で芽出たし／＼」(以上、「かなよみ新聞」明治九年十一月三十日掲載)

「相生町の松廼屋五葉君」は、花柳界、劇場などの盛り場に入り込んで、穴を捜し秘密を聞込んで来る艶種探訪者の類か。「喜美男誤」の内容は、言うなれば合巻『金花胡蝶幻』二編中巻以降に該当する内容であつた。加えて二九日

掲載文には、「サア是唐は二百廿四号に載せたことだが日高川渡舟場の一段いよく大黒屋」とあった。「喜美男誤」以前に報じられた実事件のあらましも、さかのぼって、同じく「かなよみ新聞」明治九年十一月二二日・二四日記事に確認しうる。

○梅暦の仇者揃ひ二人りの芸妓がひとりの男を引ぱり風の張合ひから縁の糸目の切かかる開化外れの意気な騒ぎは、当港境町近辺に、兼てまめ男の聞へある商人なん有ける。そがほとり尾上町の年経たる唄女の平家の官女玉虫とも云ツ可きが、此男と深く語ひ、わりなき中は人も知るに、浮れ雄の習ひ、そが唄女の許に抱えたる出雲のお国となんいへる白拍子の艶なるに仇心を移しつつ、忍び忍びに語らひけると、いつしか主個の唄女はその事を聞知りて、加茂の草争ひよりうち紛れかにかくと罵りあふに、彼お国は十五円の金を償ひて此家を去りしかば、男もその跡を慕ひつつ東京に行たるにぞ。取残されし主個の女は重き病ひに打臥せしが、彼男女等が東京にて娯愉快の閨の中へ生霊となりて幻しの如く顕はれしとの寄書が有ましたが、名前を出せば新聞条例譏謗おそろしき

物語りにて候ウ

(仮名読新聞二三号・明治九年十一月二二日)

「開化外れの意気な騒ぎ」として「主個の唄女」「出雲のお国」の二人の芸妓がひとり男を巡る顛末は、「名前を出せば新聞条例譏謗おそろしき物語りにて候ウ」と、個人の名前を曖昧な形で呈示しているばかりである。

「かなよみ新聞」明治九年十一月二二日・二四日記事や、「喜美男誤」(明治九年十一月二九・三十日掲載)、明治十三年三月十九日以降いろは新聞「猫洒落誌」欄に掲載された「金花胡蝶幻」、そして守川周重の画が加わった合巻『金花胡蝶幻』と、同じ素材を扱った記事・作品を眺めるとき、顕著にみえてくることがある。それは、「喜美男誤」以前の段階で総ての人名を臚化した表現でなされていた個々の存在が、特に芸妓やその周辺の人物で、具体的な名前を明らかにし呈示されていることだ。とりわけ「京浜間に浮名高き／芸妓国助の因縁斬」と銘打たれ、一代記の様相を呈して細微にわたり一人の芸妓を採りあげたことと、「名前を出せば新聞条例譏謗おそろしき物語り」と際どさの

表明がなされた段階とで、表現の落差は、あまりに大きいと言わざるを得ない。

三四

讒毀のゆくえ

たとえば讒謗律の問題を考えてみたい。讒謗律は明治八年六月二十八日、太政官布告第百十号で制定され、明治十三年の旧刑法（明治十三年七月十七日太政官布告第36号）制定に到るまで、広く言論界に影響を及ぼしていく。参考にするため、その条文の一部を抜粋しておく。

第一条 凡そ事実の有無を論せず人の榮譽を害すべき行事を摘発公布する者之を讒毀とす、人の行事を挙ぐるに非ずして悪名を人に加へ公布する者之を誹謗とす著作文書若くは画図肖像を用ひ展観し若くは発売し若くは貼示して人を讒毀し若くは誹謗する者は下の條例に従て罪を科す

第五条 華士族平民に対するを論せず讒毀する者は禁獄七日以上一年半以下罰金五円以上三百円以下誹謗する者は罰金三円以上百円以下

第八条 凡そ讒毀誹謗の第四条第五条に係る者は被害の官民自ら告るを待て乃ち論す

とりわけ問題となったのは「凡そ事実の有無を論せず人の榮譽を害すべき行事を摘発公布する」ことが、「華士族平民に対するを論せず」対象とされたことであろう。この場合、芸妓の不品行を専らの話題とし「摘発公布」してきた小新聞の報道ぶりは、讒謗律の恰好の対象となるべくしてなっていたはずである。土屋礼子「明治初期の言論統制と小新聞の筆禍」（『メディア史研究』1・一九九四年三月）は、新聞別筆禍件数などを集計しているが、明治九年から十三年にかけて、かなよみ新聞が受けた筆禍は三十六件、そのすべてが讒謗律によるものという。

明治十二年九月十九日・二十日、「かなよみ新聞」掲載記事「○かなよみ社中の動揺」は、その讒謗律改正を巡る

社主仮名垣魯文の周章狼狽ぶり、記者の冷静な対応ぶりとを描いており、はなはだ興味深い。

「近日讒謗律改正の條中人の榮譽を害し其營業上に損失を來たす者は処分済の上更に民事課に附して相當の償金を課せらる可し」というのが、どうやら広く流布していた改正の噂だったが、「其改正の虚実は知らず弊社新聞紙面上に於て密々駭愕喫驚する者は、独り社主」こと仮名垣魯文であった。「彼一事万一実事ならんには当新聞猫々欄内に筆する件々尤も被害者が娼業（デハナイ）營業上に損失を來す者とし而して償金を要求するを欲せん」「被害の猫妓輩がお約束外れの損失を訴ふも又量る可らず」と狼狽の理由を語る。対する記者輩は、冷静に「我輩も亦事実の有無に關せず讒謗律第五条に照され罰金五円の判決は御定例の紋切形なるも之を記者の運筆税と断念し一夕愉快の放金と思ひ切て月給の差引勘定社主の腹中痛むに非ず」と喝破する。「名前を出せば新聞条例讒謗おそろしき物語り」と言い、六年間で三十六件も讒謗律による筆禍を被った「かなよみ新聞」であったが、讒謗律とは、記者にとつての「運筆税」であり、ある種の勲章にほかならなかつたことになろう。記者は言う、芸妓達がもし「營業の損失を民事課に要求するあらば其時こそは浅黄の頭巾をかなぐり棄て探偵密を極し渠等が鯰猫筋の醜体確証を挙以て答弁」するゆえ、「彼に利なく我に益あ」るのだと。いわばこうした新聞記事自体が、芸妓達を牽制してゆくのである。それは通行の讒謗律であつても、「被害の官民自ら告る」（第八条）ことが必要だつたのだから。明治十三年七月制定（太政官布告第36号）、明治十五年一月に施行されたいわゆる旧刑法第三百五十八条で、実際には改正が果たされた。償金云々という形にはならなかつたが、その制定の動向如何を意識するまつただ中で、実は「金花胡蝶幻」が新聞連載されたことになろう。だとすれば、あの連載での実名呈示は何だつたのか。

国助と疵栄

おそらく、国助や栄吉の側にも、実名呈示の要因があったのだろう。「金花胡蝶幻」を賑わしたこの二人は、ともに新聞に投書経験ある存在なのだが、その発言には共通するものがある。

○弁駁 小山さん仮名垣さんお邪魔ながら少し怨みを言して頂戴。一昨日の新聞を見ましたら妾の事が有ましたが：あれは頓な人が貴社へ報しましたか。妾の方にちつとも覚へのないこと。勿論わつちの浮気は皆さんがよく五存だから少しも隠しは仕魔仙^{しません}。本とうの事ならどの口が新聞に出たつて人の様に社へ掛合に行くのヤレ願ふのとソナ尻の「ヲヤ御免なはい」違式の穴の狭のぢや有ません。：是から新しいのが出来たら直にお知らせ申ませう。夫も通常で面白くなけりや葛藤をこしらへて新聞の種に成よふに仕てお知らせ申ますから虚説は五免頂戴ですヨ。 横浜尾上町二丁目 岩泉栄吉

(かなよみ新聞二八五号・明治十年二月十二日)

○昨日今春の鯉節猫武蔵屋国助先生より斯の如き御泰書応「ドッコイ」到来。至極五尤ものお弁駁ゆゑ、取消替りに記載しました。絵には絵そら事、文には文飾とか申して兎角かざりは附物ですから、針を棒にかゝなければ見るお方も面白くなく、憎いやうでも可笑くなるのが貴社の筆の十八番。猫騒ぎのスツチヤン筋は成丈面白く願ひたい者ですが、九百卅七号から同卅八号の、日本橋うかれの内お客が外の座敷へ飛込み三味線の上へ応来のとんちんかん踏折つたとかいふ一條は、誓文形のない事で余り附録が沢山です。妾も貴社の開業以来かなよみの得意の切端。有ことを無など、狐気^{こけ}魅煉^{みれん}は申し魔仙から、あの一條だけ早速に取消をお出しなさい。真実にあんなりですから。

猫々道人の机下へ 五ぞんじの国猫より

(かなよみ新聞九四〇号・明治十二年四月十六日)

栄吉と国助。二人ともに、虚説はご免蒙るものの、「本とうの事ならどの口が新聞に出たつて人の様に杜へ掛合に行くのヤレ願ふのとソナ尻のヲヤ御免なはい違式の穴の狭のぢや有ません」「兎角かざりは附物ですから、針を棒にか、なければ見るお方も面白くなく、憎いやうでも可笑くなるのが貴社の筆の十八番。猫騒ぎのスツチャン筋は成丈面白く願ひたい者」と、新聞種になることを何も拒絶してはいない。

おそらく芸妓話（花柳話）は、どのような扱いであつたとしても、芸妓にとつても自身の宣伝になつたのだろう。素人や官吏を扱うことは、どうしても讒謗律の対象となることに繋がりやすい。記者にとつて、いくら「運筆税」であつたとしても、五円の罰金は厳しい。訴えを避けるためにも、記事の対象を、自らそのことを気にせぬ芸妓がいればその芸妓を扱うに越したことはなかつたのではないか。「猫々奇聞」「猫洒落誌」は花柳界の穿ち話に溢れているが、その記事をチャッカリ宣伝に利用する芸妓輩が出てきたということなのだろう。

角書に「京浜間に浮名高き」とあつた国助であるが、その浮き名はそもそも「かなよみ新聞」によつて導かれたようだ。先掲「かなよみ新聞」第二二三号・二二四号記事は、管見の範囲での国助と栄吉の登場の最初にあたる。記事以来、岩泉栄吉と国助は、共に評判を得たらしく、「東京横浜／太細樟女夫競」に国助と岩泉栄吉がともに挙がつている（「かなよみ新聞」二七六号・明治十年二月一日）。「かなよみ新聞」三〇五号（明治十年三月十日）には「横浜尾上町の芸妓杉村屋の国助は喜美男子から売出して追々開けた猫となり」と記されてもいる。このように、「喜美男誤」の影響は多大だったのである。新聞に取り上げられたことで、芸妓として様々に新聞紙上を賑やかなものとし、脚光を浴びる存在へと成長してゆくのである。記事を一例挙げておこう。

○ライ国助、お前も新橋の今春から此横浜へ流て来て華美な浮名を売物に亭主を立養しにする芸妓だから唯の猫じゃああるめへが、自己も品川の清水の伴粹も甘いも噛分て野暮な別れを為たくもねへが、金の無心に現在の本夫を使ひによこすとはお山敵の余まりあくどい狂言だと色気も醒た言葉にぬからず、モシ旦那妾に藤栄といふ主

の有のを知って居ながら手を出した貴下も万皿あくどく無いお方でも有升まい（略）出来ない金を強てとの無心は言はぬ其替り本夫に掛合妾の身を天下晴れて貰ひ受け女房にしておくんはないと生根をすへた金花猫の尖い言葉と剣幕に驚かされて言甲斐なくとうとう手切の五散財一口物に頬を焼いたは柳町のいのち取と評判の好男子だと同じ湊の町中で「よくいふやうだが」箱屋らしいふたりの話

（「かなよみ新聞」五〇五号・明治十年十月二七日、猫々奇聞）

ほかにもざっと眺めてみても、かなよみ新聞第五一九号（明治十年十一月十五日）第五四三三三（同年十二月十四日）第八〇三三（明治十一年十月二五日）第九三七七号（明治十二年四月十二日）第九三八八号（同年四月十三日）第九八五号（同年六月七日）第一〇一八号（同年七月十七日）第一〇七六号（同年九月二五日）などに国助の名を確認でき、「かなよみ新聞」にとつては重宝な存在だったと思しい。従つて「当新聞では古いお馴染横濱の杉の屋国助猫」（「かなよみ新聞」七四六号・明治十一年八月十七日）という扱いとなるのも、至極当然といえは当然であつた。

国助は国助で、自ラ次のような啖呵を切っており、「新聞猫」とまで自分を評している。

…翌る朝常着の儘で蚕の帳場へ坐り込みお神さん昨夜はお座敷の事ですからおまへにさんざん叩かれて黙止ては帰つたが妾も五ぞんじの栄蔵といふ本夫持犯姦律でも重いは姦夫おまへの本夫とをかしな訳が有か無かはしら糸の未だ染あがりも見ぬ中に自分の家から管巻の糸を引出す紛れの種紙本夫の繭へ明白が立ない今朝は胡蝶の脱らが昨夜の夢とは云はせないサア春さんと妾が中有無の証拠を判然といつて聞かしておくんはない赤襟脱りの若猫とは少し違つて新橋の抱えに名前を置土産此横濱へ来てからも疵と綽名の大猫と鞘当筋の意気張は未かなよみで猫々の欄を設けぬ其中から跡は次号と載られた新聞猫の国助だヨ誰だと思ふづかもねへと威張附られ山の神は昨夜の権幕引換て猫にあふたる廿日鼠チウの音も出ず

（「かなよみ新聞」九三二一三・明治十二年四月五日）

「余や往昔横濱在留の日朋友と宴するの間偶芸妓国助に接する時あり」とは二編序での魯文の発言であつたが、「か

なよみ新聞」一〇九五号（明治十二年十月十八日）でも、魯文と横浜支局の守屋正蔵が泥棒に遭ったことに対し、お梅やみの手紙を国助からもらったことが示されている。まんざら知らぬ仲ではない、一種の仲間うちでのつづきも、合巻化という側面、持ちつ持たれつの関係とも言えようか。

しかしそれにしても、という思いがよぎる。先掲三編末尾の一節を再び引用したい。

芸妓を引て東京へ来り築地辺にしばらく世帯を持て暮せしが浮気者の癖としてどうで末はまとまらず當時はわかれて詰らなくはや散りそめし園の梅二度の勤めもなり難く見る影もなく落塊しとは卒塔婆小町の昔しを茲に浮気芸妓や汚転婆娘の卿か勤懲の端にもと拙なき筆に書著はしぬ

「はや散りそめし園の梅二度の勤めもなり難く見る影もなく落塊し」と、卒塔婆小町に準えられた国助とは、表現としてあまりに厳しい。こうした感覚は現代人のものでしかないのだろうか。これに対し、国助はどう反応したのか——「有ことを無など、狐気魅煉は申し魔仙」としたのだろうか、「余り附録が沢山」で「真実にあんまりです」としたのだろうか。そのことを知るすべもなく、ただ思いをいたすばかりである。

〈補記〉疵栄こと岩泉栄吉のことについて。「喜美男誤」以来、栄吉も新聞に多く登場していた。「浮気と情夫が玉に疵顔に名代の金看板芸名は都一かめ岩泉の栄吉猫」（かなよみ第六一八号・明治十一年三月二十日）が、坂東花橘などとも浮き名を流したことは合巻にも指摘される通りだが、「金花胡蝶幻」が「猫洒落誌」欄に連載中にも、いろは新聞に先代の岩泉栄吉との喧嘩を報じている（いろは新聞一〇五号一〇六号・明治十三年四月十四日十五日）。記事には「名代の動乱猫疵栄」「疵栄さんと言れちやアこの横浜の港内で誰娛存知もありがたや娛愛顧厚き全盛つ妓」とあり、当時全盛の芸妓であったようだが、明治十四年十一月刊・近藤道治編「横浜芸妓評判記」初編で「大上々吉」をもらった「岩泉相吉」の評判中、「頭取」イエー、此お人は客と見て法を説利発者ゆゑ滅つたに僥早は有ますまい疵阿姉の大太夫が退かれてからは岩泉の立お山若女形の売出し」とある。明治十四年段階では「退かれて」いたらしい。

※本稿は二〇〇六年三月十四日、国文学研究資料館（戸越）において行われた仮名垣魯文研究会月例研究会において発表した「魯文〈閲〉ということ―『金花胡蝶幻』を中心に―」の一部をもとにし、その後の研究成果を踏まえ考察したものである。その成果の一部は、基盤研究B研究成果報告書『原典資料の調査を基礎とした仮名垣魯文の著述活動に関する総合的研究』解題編（谷川恵一編・二〇〇八年）に執筆しており、本稿と重複するところもあることを諒とせられたい。